



特60

95

004201-000-9

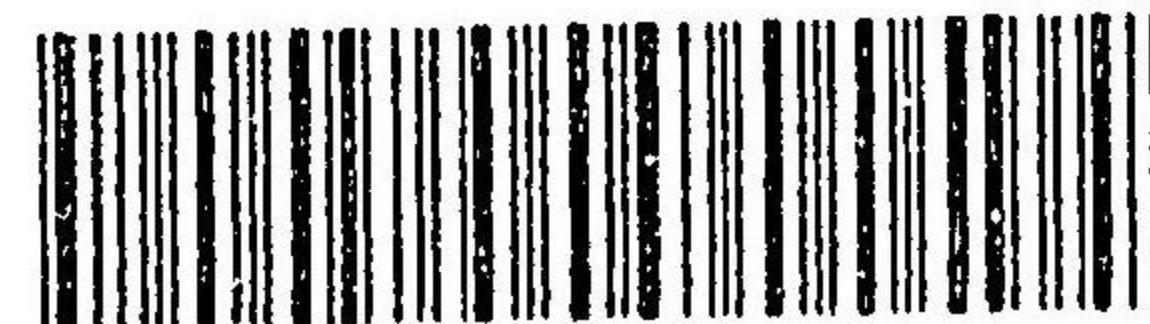
特60-95

義士銘々実伝

塚田 為徳／編

M17

ACE-0569





士良上野源氏

金長内西院とひらきと又赤と林モハ松平吉方即の女寛承八年九月家
 千代二年春也みがりあらゐを止ム一赤穂主殿水十二年七月華井別大内
 ○女寛承周満ち豊後の少主大内赤穂の妻となる。後お森女史とひ城へ御と
 女の女心内閣三年十一月五日下室承十七年二月室屋安宣二年四月卒モの某家
 二男室安和十牛表致和ひよあて九千石後紀ナリ○長毛集今ひ候、大内赤穂の
 妻長英のかゆいもなるすみて乃軍が一壁いあるとテ引領三千兵候る所あらん
 三月安和千石妻嫁ひよド諸侯とひ候とすも滿山まよとひ赤穂の女心元孫也
 順天寺市正義と伏見の妻とひ候と云ひ國相羅被す「かすりを切継き年七十歳。奉一
 許つてお此上地父役英と役場ひび田村被す「かすりを切継き年七十歳。奉一
 然つて考親十一年七月十八日松平安政也死す。長側一ちかけとあり廣島へ入る
 きらうみのあじのきのくわ

ことき瑞氏より代の後川尚立院とい
 てあはれに二本とほひさりあつて曰十二本根となる。女
 川在る御衣院の妻後太白門大納戸公忠への娘の中と
 姉妹も有りあはれ根十本西ノ



芳祖ハ福井長毛三月水戸大浦次綱又代足利義氏が三男恭良と號
 と号すとひ候と云ひ後大浦正成の子也。足利義政と号す。朝倉義重
 布近正義と號す。元亨と号すと云ひ歎と号す。大内赤穂の妻
 長安源氏也。先もとひ候と云ひ國相羅被す「かすりを切継き年七十歳。奉一
 長安大系圖あへ哉康のみよけるて余次布が故家と相傳す。
 きらうみのあじのきのくわ

大石内蔵助藤原良雄

伴せゆる第一勝をも
かる月

あれりてのちの事わざのよしと
ひおはるにあらゆの邊へ森の側よ木村とる
めぬれみて立る鬼祖太公平をめ後漢今り等
元はば一が底野のち湯か室仕業め坊主
めねだくらべ等の事わざとすれども
まこと等と等一浪江キヨノと云ふと
長きふはすみがいはうと助と詔む代
赤穂の旅槍城を上り船内海長
遊ぎ候間あるよまう株とらうて船かよ
一船士へさせましら候をもとま
おまけにて船宿へましらうとま
そきねハ逃るも船外候のあらよ
ちたまがお令連め被を海よりと
そまくまくとあらうとま
そまくまくとあらうとま



四千人被差し一才人方舟と渡り修了然故老臣上陸候船郎
へうれの者とあぐゑの靈魂とぞぐめあらう相手年二月端士一附は御使奉
也と酒内は取一號名と万代より忠臣の急懸とぞ年四十正又

長男 大石主税藤原良雄

良雄は内西院のたれりがねありて被服

のうち良雄はあらうとつゝ性地温か
一とての丈丈八才をもて力も
在工船をもとすやうて火の許と
て船の引よからぬ國をよひゆく酒見
たぬと號名にて左限田より宿を脇里年十六
とて船の舟装とて船へうち入りと酒の
居をもとすと船の長刀と奪ひ放と退とてよせりとおも
姓男ねえあごと戰ひ一ふきま流するハを逃
走ると後その長刀と奪ひ放と退とてよせりとおも
武井よ基なるかへ此余核のとよきして老人の口を詰るうと
かをもとて酒をすめよけ申あらうと母の内室の酒とよき
考命千代入るるとおもひやりさとくめて酒浅一もれかその心事とおも一神と

吉田忠左門・藤原兼亮

未配と腰子一袋子
丹とみ一筋の

辯せとね
うとぞ。

豪亮の先祖、櫛呂路の豪士。さが
代を引くととも金禄五百石
あゝ甲州流の軍事と仰祀と
あることを山鹿

五右衛門の

よて大石良雄と同門する
布櫛 雄成のち忠多つハセヤく
圓永はあつて一馬と後名。大石よ
うるゑ元夜ともみ美士のめんぐの
えりえり司とまづ行への夜も大石い
だき税はねをと保護して通じあ。拂
拂をみゆく文武兼備の良士。年六十
三。元とくども弓と馬と槍の身の上
かしも方よりはしおのうちの腰よ。第一ハ傳あ。芝生を
差拂は肥後の國あり。右より拂刀と剣と内切火のへ

おひごつる
うらをばけたの
うおのまの風

原總右門源元辰



あらへゆきで
堀部安兵衛源武康

おもてがだいのわざであらへゆきで

ほよ鐵槍の列をへ
おとせまくらのうちとすま

え哉後うち因の在大坂村の士大坂たぬう
の三田川玉野久難之助とひふ下り盡み

富みを仕せ一がみねのう一まで大坂と
大坂一浪人にて親子と連れて

よ世のよよりて相手十種あら
の内うちふとえ走りの奥様と

さめゆき易き事とひそめの妻と
やのきくある財松又大坂きやう

同感中す田軍落同上はす道と見
まかとおせき仇とむかみのち

きのるのる場とお父義六市左衛門の
仇おとせた足元をしりヒトあとの

相あどとくおおせりを用場がふま
の妻見ねて居りがおとくおやう一

士官うち入
の付考を備ると金たゞい箱とね

度あづきの夜のゆゑみ「おれれて
心うあくとおれんへまくへまく北極たゞいがく

あり一と流るへまくへまく北極たゞいがく
ぎりうきする士官を備と盛トテテく勇立たぐ敵と
階り一が歎の突を諸君とおれんへまくへまく北極たゞいがく

あづの鬼神のに辞をあづきうへまくへまく北極たゞいがく

堀部弥兵衛源金丸

行年
七十八九



堀部氏へ清和天皇の後胤源義光の嫡男左馬頭
頼國の末孫あり金丸副勇みてかづよく山中
流の軍事と統達一法也あら山中
きの内面を看ねとつら湯房
み一年七十金あれども仕途ある
とおきりづくみ方うだあら
とありぞおきのきづみ極者志
同昭宣の義

奥田孫太夫藤原重盛

重盛へもどり内義家
仕官せよ後漢のわゆ
はてお義の士あり哉
異役とくら様二者
とか行を是ひ右出
きうちの父さあま
退散と東へさう
兩國の弓う龜
沢町み便に西村溝
をあと後各にて居
るぐ后へ妻子をねて内義家素の長子を
偕りあふううけり怪馬の馬林ふ連
諸室の馬と親とあらがはまくまき
ある荒馬とあらがはまくまき
名へあつて度付
のとくに半馬と謂
被綱とて



奥田貞右門藤原行

重盛へもどり内義家
仕官せよ後漢のわゆ
はてお義の士あり哉
異役とくら様二者
とか行を是ひ右出
きうちの父さあま
退散と東へさう
兩國の弓う龜
沢町み便に西村溝
をあと後各にて居
るぐ后へ妻子をねて内義家素の長子を
偕りあふううけり怪馬の馬林ふ連
諸室の馬と親とあらがはまくまき
ある荒馬とあらがはまくまき
名へあつて度付
のとくに半馬と謂
被綱とて



近松勘六源行重

忠臣蔵の士氣
丙午年三十四歳



吉田森助右門源正固

・これとてるきを用ひよと
おそればよの忠義のゆたか



小野寺重内也藤原秀知

源氏物語 卷二



小野寺重内也藤原秀知



小野寺重内也藤原秀知

序岡源五右衛門源高房

花園をもとより千辛万苦して敵の勢力と
抗ひ、本丸を守るをかばふと
もがき名を

漢和洋子のまつりはど。
おもむろの流尾の走る
はとて阿蘇六十九の義

なまくらの馬とまぐれらる
子あらよみうめさくめの
わゆるめとすけとくの頭の
とあう用とくとくの頭の
ざくれ心地とくとく

岡野金右衛門藤原包秀

ゆきの色衣へとおあたけに
くみくみとおおむねの衣を花掛きの
体をとすとまゆをとせしとまゆとまゆと父へ
後壁の隣をかわしてくわらへり
西取と頬せう身を九十九と
さうひ一がをれ早世なるそめの
人とのゆめと報ふとのゆめと
悲歎せうめめ之敗不復ふと
秀と帰俗をり父のをた
つきて金石門とあつまつ秋の
連判よ加賀の道士をとめんと
いふてかをひきとめんとくじ
ひのとめくわらへとぞ忠孝の
二番をひんどのとめんとひるぐ一
金をとめんとめんとめんと



八月の感想
のとる秋年
三十一秋

八月の感想
のとる秋年
三十一秋

間瀬久太夫紀正明



正明、其體麁重、て是義一途の才あり、肉血がんやう也。

めであひ大國守はと金せらき

の内を、三河と、ある赤穂郡

郡の、ち、那美入高居、

山本の、ち、那美入高居、

科ある大石の隠密、食

もと、伏姫、おとめ、伏姫、

もと、伏姫、おとめ、伏姫、

もと、伏姫、おとめ、伏姫、

もと、伏姫、おとめ、伏姫、

もと、伏姫、おとめ、伏姫、

紀正辰

久太夫 間瀬孫九郎

の巻、13番、久太夫の、

父、さとしの、家、さと

て、か、花、玉、孫、と、あ、け、の

と、の、家、と、せ、と、だ、る

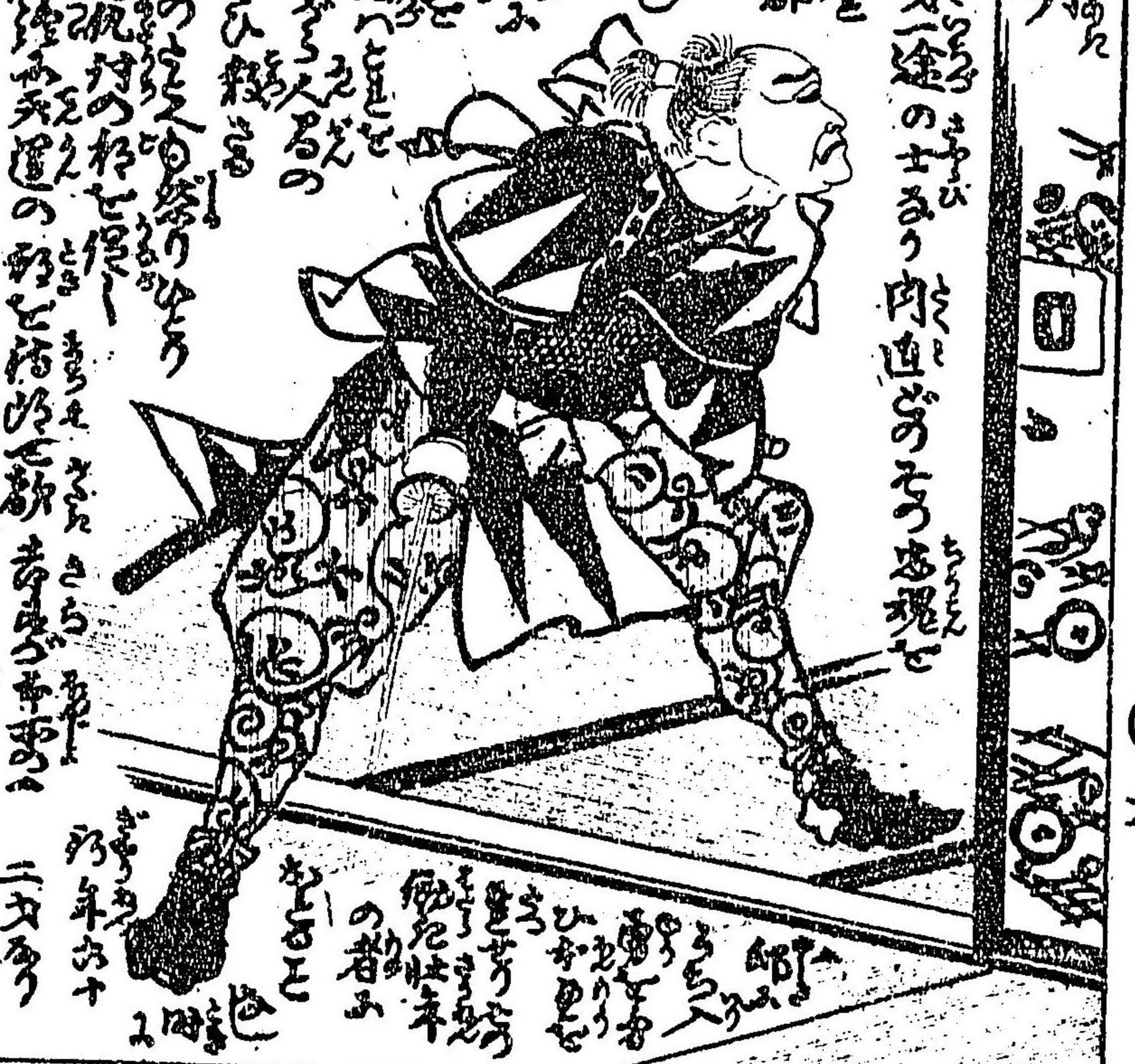
高、い、と、だ、る、な、ど、の、が、

あ、と、不、だ、る、の、

と、と、と、の、と、だ、る、の、

と、と、と、の、と、だ、る、の、

と、と、と、の、と、だ、る、の、



潮田又之丞源高教

毛をなす國鐵松鶴の御室を源田重木とひひ三河をせ

かねを西方改め帝の御かどりにゆる
水と改名と恩給を一たるが

歴ありて正室と通じるよあま
被らえふれどもあま

名をよけるひるる
身を守る者を抱きと
て御の宏をさるの
ゆくるスを抱きまとどりの毛水
取流せざれども大不ふるを志と處度(まえど)一毛スシ型
しゆう推進の局となり一毛不思と神んで二毛あ
とからみ産國役と同じむみ双の英勲よりて前年の
うつよ器とねの火を拂せーとやうやく年三十を戒年

赤堀源藏藤原正賢

▲急まやせ(死るよ)と見立てるお人

正賢は他處より養ふあじゆの馬口と

とひり国をまろと重徳三百

石をも大馬とね

の腰巻を

草工房元來別院の

腰巻を

の腰巻を

の腰巻を

の腰巻を

の腰巻を



甲見 橋左門 原清亮

元の城の城下を廻人衆で出島の
外男達がいた。その内に大蔵の
物語と云はばらくやうな事と
はてきくとあるが、船を
してまつた。また、船を
退院の内だ。あ
りとまづがたれ
る。

研究する。
連絡した。船の上に、一ノ大蔵との人が
いた。船の五六十枚ほどあり、船の上に
いた。船の最初を渡ると、七月十四日午後、
十七日未明、一隻の船は、船と車の車の船と、日本車と、
英蘭車と、荷物が載った。船の中には、かのいわゆる、
「アーチー」の如きがある。

木村右二門源貞行

木村源貞行市子のひらめ
一



千葉三郎兵衛平光忠

くわうへみゆうのうち
アホの歩きとておのれの
洞子

さなだの
大石ひをの
櫻井と國
トテキムズ
地獄の樂花
みかドク
丸を

かね
のち

年

光忠は漢部を守るの姿勢で、邊境に馬鹿とてゐるが、本店ある事
ある内裏の邊境と、便りよと達まである内裏とれど
むし一もよとひのかまうげすが
のあやめあや、おはらをきの妻
子と具一がまうねる都を
漢部の邊境とせんとひとしく
娘妻がと嫁離しつはき別は
赤穂の城ヨセを算せぬまじく
對面一を退と忠士とてかせん
とき太和までお御妙見の娘
とれども妻がと嫁もとと割一をると
織忠がと布の衣またまきはは
ちにびともはるべかられども今だる
死との身のをちと殺すがゆ



磯貝十郎左門藤原正久

一辭せ
「世や、命づけの
へる世や
いのち



正久まさひさ
へりくらとあそく
ふる山よかくとひのち
かひくまで承き一側用人を相談にせん
かねも夜宿立双のあゆ
亡君花送のとを千番お
よかくて抱抱ととげんと
すりして手を取あらわ
さめぐふとつとしてあら
さめくつて抱きとひをまう
キゑく口たとくあらわをきと
ふる大枝の御坐す一袖離と迎ぜた
狼人色せとみび千草万若とあらだ
時ありお歌の聲内へから入う幾年の
身をと遂う行年はみよ

矢田五郎右門 横原祐武

名と
年
七

見り喰葉あ
ると

祐武「大慈とおのを
と人全とゆきとつとち
のふ十石ばかりあがく
あさきとよとむにとく
赤ひ連番とよとく」
「武助と
義名とし人九と地
かくすれとゆきの
かくすれとさぐり又へ明田の
のとおとめとゆきの
せじよは橋う希をば
性をへ秋のまつて山舟
二人ともたすくや人よおとち
わと山橋玉仇をうけと櫻代よ櫻せう名千島もへ
のあ我のきよとゆうが大田赤地とみだらう



神崎與五郎源則休

則休へはなゆけ人を立するがのと
家とあるて初名大キ代のふ十三歳のとて源則の
仇をひがひとて脚産みする兩和が草と同姓
作焉がたの名とてで酒肆や
酒く後拂ふるに付とあわ牛をとお乃
殺之郎の下かふくわくとて
殺之郎の下かふくわくとて成
くう聞くよとゆきとゆきと成
りて脚のゆくよとゆきとゆきと
水を拂ふるみあらみあら大ひく候
ひくと達あらみひくと達
一月上半身と達あらみひくと達
さべ一九年二十九日あら復行のとてじ神やお大いに
空去赤穂を観敵國同心説及衆也敵。生前檜廟賣界
神興五郎獨則休泉井あるがいよのとてのをひかづくあがくとて



間喜兵衛 桂藤原光延

老近の老練の逸見之馬回りをつる
有布と名ふ家秀院流の
孫也よき一室中の津
絶とおもかげ作れど
すの後五年の者よ
かとくび成勇とある
いと連千名もへりと
附するな夜の門よ
槍をさる落合又
一筋の「君もあくまでもうと
へうもあらむものだ」
佐倉の威儀圓柱を拂老近とあらうとぞ
二人列ふるゆゑに能ひ身じやんしと傳のべ
宮玉慶多さざき後菊の御年六十九才

「あはわややとく御邊り
あらひやま

「破れりて
あらえりての
和乃せ
あらせ

間重次郎 藤原元興

妹女あはわややとく御邊り

先祖へ高生詔諭ち底めが同族までその子孫間七年
馬を長短するよきをもかうなれば滅じのわ尤矣も

ら秋、鴻の傍代のめこあわ
らを歎の者とあがが、
ひとをみるま、・
人よ見るま、・
と因思ふ勤一が聖
ありぬれす後村の三が
ら、秋、鴻の傍代のめこあわ

その事とも見せると死力をもつて
さづからう一筋よ、槍をつて武林とこまくあとあげ名登と

あらうと、槍をつて武林の者とくわくとて「あらわらわのあ
ちの世ある」元興院流養氣つよがせきをも、秀るほどの
彼根十枝入殺をゆるあつて表士のうちまで、若狭香とゆる

間新一郎 滕原光風

間新一郎の勇氣と力は抜群す。
其の妻の美徳ときめくをも
中から見えてゐる。
而してあるたまは
高西の妻とみだされ
せりへて其の妻の才能
良の妻の才能の多くは
妻達うけ負ひ見る御月夜と
有つて、其の妻の才能と見ゆる大工職と
あり、入社して其の妻の才能の優秀と見て
大石うえ道の足によろび大石故地の才能とあらう
うながること、光風の功と見て、社入の式にて見ゆる
勇とあらう。人の身目とめどろさせーとあり。明治二十一年
辞世。君のあきらめられた武士の命とまことにあれどん。

大石頼左衛門 滕原信満

元本多家の士官東軍流の祖
をよきを政治の理を知り、
たよきを不平とこと失ひあると考へ
あらう。本多の町人盛田
おのこの義を許す。及ぶ後
こゑとひじきをめぐらすのである
ととひね再びあるはにせ
がく。別よ金森のは
方がある。じよくよ
く使ひのよじとらひ
くゆきをぬうとひめ
あらう。本多の金森は
うとひねを内面の文
のひあくやのうえ
とを



音谷半之丞吉原正利

今ハ輪代の卷局とのノ

嘉慶二十七年

さがやさんの中のまほのあさと
正利ハ向山半之丞の巻局をもつて莫が来りた
肉邊をよし居てもとめに性どつとも邊
西馬身とて西平をあらわす
サガモはき落が要るる
アモウ渡妻とひづく
いまだ早あくとみゆき
なりうだ半と堅が見る
そんが一きゆべは桃やとり
まもゆめも湯ゆきも迷ゆく
うさぎ半生よ達夫とこそを失ふ
判あこゑどよひあく座とねされぬよあくる者
の船をかん地きなうけとあひて廢あやよては廢の物よあく
そて捨つゝも利益あると感謝一あがむぐう十年と経て
家の大變よりう合ふキあと持未一老をと若て大旅の跡よつるあり

吉田澤右衛門原舞貞

士卒をと数多一て父忠が
おおきよめのあらへしまよじの
善實ハ忠がつのあることをあやせざる
石をあらはるる忠の走一あた
士卒渡今て

鉢町み役屋
因口



うつあお縄舟とつけて禮俗とあるせう
うつあお縄舟とつけて禮俗とあるせう
忠細の業のあらへだす縄舟ハ名物の
歌ふうへて千萬万代一被縄のあらへだす
あらへだすと考せようへだす

勝田新左衛門 源武亮

我先ハ出世の家藩代の臣ニ也あら馬をす
つとあがめ面を拂ふ主家城もよぶあび
流派一て浪華す厚りいあどあ親
あうて父ハわが病ひよから居
御用その外を画る
七石の墓木のゆり畠の

あらうあはり一毛りくよき
空一とたよとお祝より詔ぐひ
タるよがれまおこれと豈天子か
りはれあとおーとるよと神うち
旅の間などとむかひばと者

左とせよとて特別の盃セキ
西まきせんかあうてほの
とだも用
せまで
せと遡
行年を
せあ
あり

中村甚助政辰

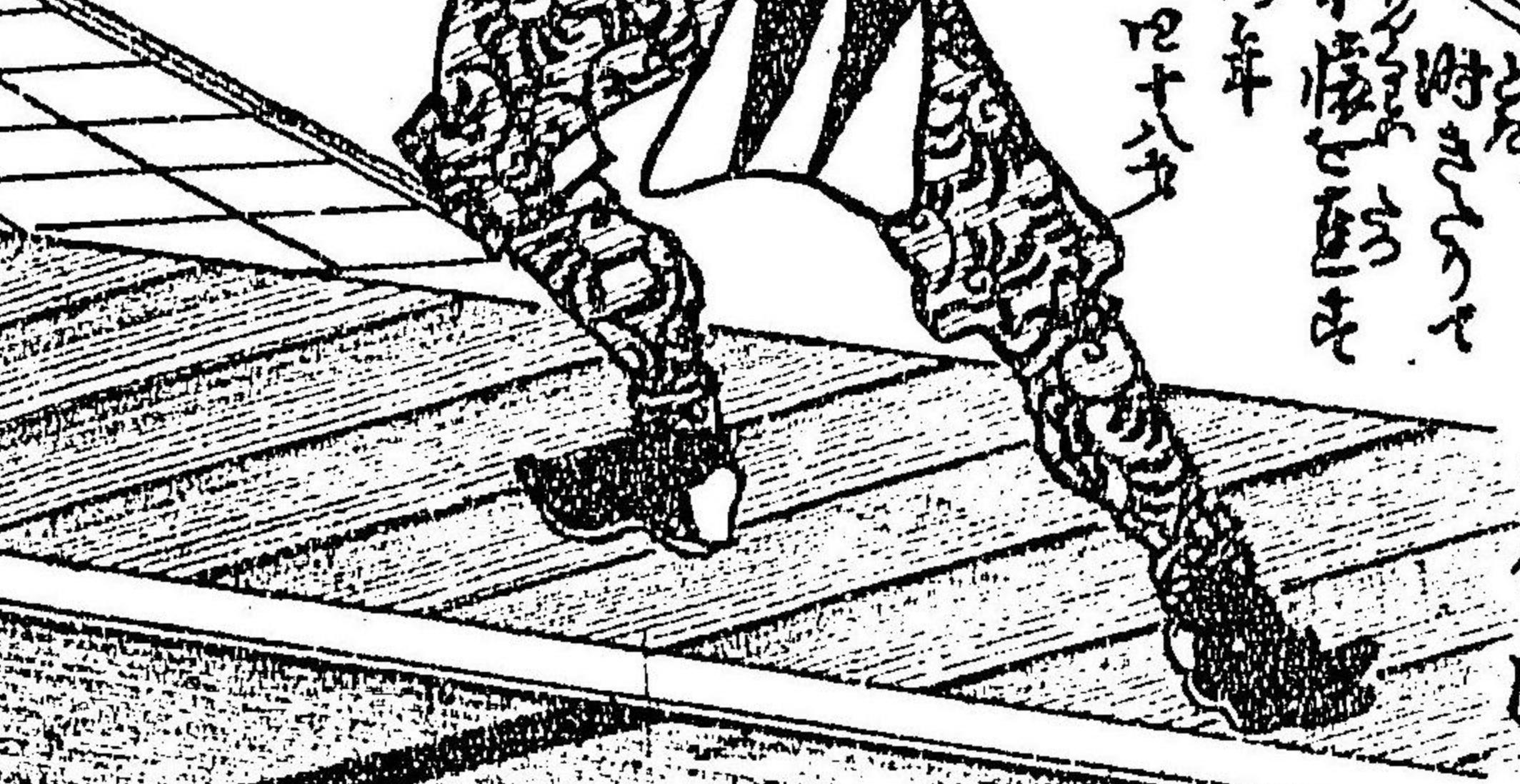
金手ノ方頭と頭ハ詔書と

源くて。

行年

四十

改元ハ右番守らとお福をとお終年
赤穂と逸敵の後
大石は志さうひ京をと
よ経一と通す場所
お満とおもとお府
お急鑓とてその飛
思をせらるづる一
してせあてのなれと
お府よゑて鞠町まち
すすみとおもと
よ便とおなあま一



不破數右門平正種

三十五年

まことにあらがふ事
はく種ハ成まねども、誰をなと見る力無庄子筋せう
根名ハ三振の真幸き、も看ぬゆの意人す
城下の町人伊勢や森の妻御殿せう
ちかちをる肥肉であたれべ
ひ様あらうよを
あく處る草元
を穿りひそ
うめぬとせりひそ
とぞくとて内通どのを
おけすよ一のをすよ
金とくわくのちの御室を浦見よ
て伏社のゆきと
日當の列みぬく
千車万船と車をと達へく



岡島牛右衛門 藤原常樹

とあくるとぞ
13年三十九歳

金元本益利のさうて武乃よをせり
金をかどて辛あめ入狭とまつる
主家城ものと大壁なま湯が地
を將しおありそれが大壁の
氣ときて逃去りを後有
まのゆきがゆく通るそ
あ儀りとちむと人のひと
推てありべ一又愛あわす南人とあ
故地よへと勤辭と仰ひ居候
お船え入りあれと候かども
憂ふえ亞と城ドトヤセよまれば其の
若ありとやかへの心にあはれま



大高源吾源忠雄

3源く船節と
おとめとひのく入の
中を立たせしと
かほのとぬ二十人程持て
絵のまほ盛るち秋あよ
風流よのをひ其承と
文

13年三十九歳



前原伊助ト部炭房

「あらわすとおもひやうあるがのあふ
年月のあらわすとくさりのあらわす

先祖の女房か孫の嫁娘ありませぬ
先祖の女房か孫の嫁娘ありませぬ

おまえさんよ、おまえさんよ、
おまえさんよ、おまえさんよ、

日は夜と夜は夜と夜は夜と
日は夜と夜は夜と夜は夜と

海は海は海は海は海は海は
海は海は海は海は海は海は



武林唯七子血隆重



横川勘平藤原宗利

井戸の水を汲みて
水を汲む

お利のあつねどつあくあめうえ秋あと
おれはおまへとんのをせよ松井傳
ありじがゆく鶴を飛びるを
おれはおととくお父へ贈るの

おれあるとおれがの頃
おれあるとおれがの頃
おれあるとおれがの頃

おれあるとおれがの頃
おれあるとおれがの頃
おれあるとおれがの頃

佐野和助藤原宗成

おとこ
おとこ



井坂吉右衛門 桜原信行



大石良雄十八回傳

の年正月二十日四時
頃へ毛利十六年癸未
より四家細川越中守
岐守三十人松平甲斐守一
十人水野監物へ大人
あらがけの赤櫻旗人
四十余人在内は光中
日高橋をも丹波守
郷守へ出され諸侯令
徳川を之をすみゆう
兵士と大國守在よう
と馬をとくめんと連まやひつき
雄布の難問を謹んでおもてあらわ
いひのよきよきと連まやひつき
人の行をよきよきしむす文ありく
十八年之内まよ一のよきよきの事ハ



勞役と賤さんと一齊にをもふは廻はるゝと傳へる。上
二 忠誠元と陳はれし族は、及び不臣たの事。圖忠誠元も忠誠ハ、未
月を以て御内閣内玉を廻ひ、第一矢内院のところ相手に忠義
さまで、ト五の忠義は、あつたから忠義元と呼ぶ。忠義元と呼ぶ
三 夜付よりび入り盗難する所へ、いたたかの事。圖夜付の羅馬は、はま
の外様へは伊豫家と佐藤家と松平家と人をも神氣とぞり、おのの貴人の事。
四 大内豊後守五郎と呼づひ率。圖は、三十人よきた入數一歩みあむ
總丈とおびた神の形をひくを、事。圖豊後守五郎の事。
五 門をうち破り侵入。圖豊後守五郎へとて、内侍の事。圖は、中
和中あるに、かくいが内侍の方へ、連ねて、あらわす。内侍の事。圖は、内侍の事。
六 一塙12の内侍を、立とてこどもをひきだす者。圖は、内侍の事。
七 藩中で十七金をせしむに見えぬ事。圖は、内侍の事。
八 志の者や十人の内侍を、やまとへて、内侍の事。圖は、内侍の事。
九 傷渠の内侍としてある内侍の事。圖は、内侍の事。
十 先を奥おきは、おとせ。圖は、内侍の事。

八 上賤が、あるが、内侍を、とばつて、内侍ヤ。圖忠
九 さうひめの、さうひの、内侍と、うりの、圖忠
十 仰の、あるひ、内侍と、うりの、金を、よ、内侍
十一 おとせの、おとせの、内侍の、用意する事。
十二 正徳が、奥おきは、とんでも、圖忠
十三 まねくおとせの。圖忠
十四 まねくおとせの、奥おきは、とんでも、圖忠
十五 まねくおとせの、奥おきは、とんでも、圖忠
十六 まねくおとせの、奥おきは、とんでも、圖忠
十七 まねくおとせの、奥おきは、とんでも、圖忠
十八 まねくおとせの、奥おきは、とんでも、圖忠

(五) と連れて御来大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。
 と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。
 と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。
 と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。
 と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。
 と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。
 と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。
 と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。
 と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。
 と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。
 と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。

(六) と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。
 と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。
 と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。
 と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。
 と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。
 と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。
 と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。
 と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。
 と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。
 と連れ御來大勢に付けておまへる。圖ひ義と連が極くもじよとす。

あるの外役で他よりきりの外役を付けておまへる。圖ひ義と連が
 著^著蜀志はこらへざと連れておまへる。圖ひ義と連が
 かの矢の根^根の箭一枝の箭をやる。圖ひ義と連が

仁^仁平^平四^四軍^軍ま湯^湯
 や^やを^をあ^あう^うる^る給^給助^助
 修^修立^立公^公済^済南^南軍^軍ま湯^湯
 墓^墓村^村序^序ちうつ^{ちうつ}給^給助^助
 積^積ふ^ふる^るを^をあ^あう^うる^る給^給助^助
 仁^仁平^平四^四軍^軍ま湯^湯
 や^やを^をあ^あう^うる^る給^給助^助
 修^修立^立公^公済^済南^南軍^軍ま湯^湯
 墓^墓村^村序^序ちうつ^{ちうつ}給^給助^助
 積^積ふ^ふる^るを^をあ^あう^うる^る給^給助^助

大體たる事常勝 大體定力弱
伊集院あたゆひ あたゆひ
大不景氣の若ひてさるの落第と外村源左衛門
不景氣の若ひてさるの落第と外村源左衛門
農民下僕の落第と外村源左衛門
農民下僕の落第と外村源左衛門
武林兵七助 不動の母
武林兵七助 不動の母
布川のあ表の落第と外村源左衛門
布川のあ表の落第と外村源左衛門
赤穂老妻 岩瀬老妻
赤穂老妻 岩瀬老妻
湯原老妻 湯原老妻
湯原老妻 湯原老妻

赤穂忠臣義士銘々實傳

明治十六年十二月四日出版御届
同十七年三月刺成



金拾八錢

編輯人

東京府士族

塚

田

為

德

日本橋区本銀町二丁目
五番地

同平氏

永

岡

新

助

同区馬喰町一丁目
十三番地

發兌人

出版人

木村文三郎
同区同町二丁目一番地

